長崎県佐世保市宇久方言におけるゴト表現

門屋飛央

第一章　目的と方法

長崎県佐世保市宇久町は、宇久島と属島の寺島からなり、五島列島最北端に位置する（図1黒部分）。他の島々にはない言語特徴が期待される[1]も、宇久方言に関する先行研究は少ない。

管見では、原田（一九八三）、『宇久町郷土誌』（一九六七）（二〇〇三）、月川（一九九七）に記述がみられる。いずれも表現に関する記述があまりなされていない。

今後、宇久方言の特徴を明らかにするにあたり、まずは九州方言で比況表現として、よくみられるゴト表現を足掛かりにする。同じ九州の博多方言ではゴトの一語形で言われる発話も、宇久方言でのゴト表現は、ゴト、ゴテ、ゴッなど多様な形態で用いられており、使い分けされている。これを明らかにすることは、宇久方言の特徴の考察に有益であると考える。

調査は自然傍受によったが、宇久島を構成する十の「郷」それぞれで、一組もしくは二組に協力して頂いた[2]。年齢と性別は様々で、いずれも幼年期から、その郷で生活している方を対象とした。筆者を交えた日常会話で、時として予め用意した質問に回答して頂いた。録音機材にはICレコーダーを使用した。調査期間は平成二十年八月十四日から同月二十二日、約二十時間に上る録

図1　九州西北部の中の「宇久島」

音時間の中からゴト表現（全百八十四例）を抜き出した。

以下、ゴト表現を語形毎に分け、上接語と下接語に着目し、そこにみられる特徴を考察したい。

第二章　ゴト表現の意味

ゴトとは、古典語「如（ごと）」であると考えられる。『古典語現代語助詞助動詞詳説』（一九六九）を参考に、古典語では「体言＋ノ＋ゴト」「用言連体形＋ゴト」「助動詞連体形＋ゴト」の主に三構文で用いられていることがわかる。

一方、方言でのゴト表現は多様な意味で用いられている。まず、九州方言全体を記述した住田（一九八三）に挙げられているものを列挙する。氏は大きく四分し意味を記述している。傍線は筆者によるものである。

①比況表現

ヤサイガ　ヤマンゴト　トレタ。（青女）

（野菜が山のようにとれた。）

②様態を端的に指示する表現

（ア）　シーエンゴテ　ナッター。（老女）

（年をとって、料理もあれこれと）できないようになったなあ。）

（イ）　アー　ウレシカゴタール　カオ　シトッ。（老男）

（ああ、うれしそうな顔をしている。）

③希望表現

モー　キョワ　サムシテ　ナコゴタル。（青女）

（もう、今日は寒くて泣きたいくらいだ。）

④推測表現

コッチン　スイカン　ホーガ　ウマカロゴタッ。（老男）

（こっちの西瓜のほうがうまそうだ。）

宇久方言も、これらと同様な使用例がみられる。これらの表現の派生は、「如」本来の「二つの状態を比況する表現」から、実際の状態を、話者が判断した状態で示す、「断定を避ける表現」にも広がったと考えられる。①のように、「野菜の収穫量」と「山の大きさ」を比況する表現から、②（イ）を例にとると、実際の「何らかの表情」に対して、その表情に類似するのは「嬉しい」状態と話者が判断し、その判断を示して実際の表情には言及しない、断定を避ける表現にも用いられるようになったのではないか。これらの意味はゴト自体の意味派生ではなく、ゴトへと受ける述語の主体によるものである。三人称で用いると「様態」や「推測」、一人称で用いると「希望」という意味合いが出ると考えられる。

さて、宇久方言のゴト表現は「ゴト系」（五十八例）と、動詞アルをつけた「ゴチャー系」（百二十六例）に大きく二分することができる。次章では、それぞれの形態的特徴を考察する。

第三章　ゴト表現の形態的特徴

第一節　ゴト系

宇久方言でのゴトは、多様な語形で用いられている。この形態差は、用法の違いにも関わっている。ゴト系はゴト、ゴテ、ゴッの三分類でき、用例は少ないがゴッテ、その他もみられる。詳しい考察は今後の課題とし、本稿では、用例からみられるそれぞれの特徴を挙げる。

ゴト系は、主張部分による使い分けが考えられる。

1．ゴト（二十五例）

以下に、用例を挙げる。その際、ゴトの上接と下接の節のつながりをみる。

（ア）コドモバ　ダマス　ゴト　ダマサルータイ（蒲浦、女性、八十三歳前後）

（徒歩で病院に行くと、帰りはバスで帰るよう先生に説得されるので）子どもを騙すように騙されるのだ[3]）

（イ）テルチャンネ、カワイソカッタッチャモンネー、ユメン　ゴト　ナクナッタ　モンネ（松原、女性、八十歳）

（同級生が急死したことに対して）テルちゃんね、可哀相だったものね、夢のように亡くなったもんね）

いずれも上接から下接へ節がかかり、つながっているといえる。（ア）を例にとると、「騙される」ことを言うために、「子どもを騙す」ことを挙げ、比況している。（イ）でも「亡くなった」ことに「夢のように」がかかっている。上接から下接へとかかっているため、上接節は下接節の補足として働いており、下接部に主張があるといえる。

2．ゴテ（全十六例）

ゴテは上接する節が引用・例示として機能している。以下に用例を挙げる。

（ア）オークボニ　イッテ　キケバ、オバサンガ、オバサン　ドガ　ユータ　ゴテ　ハヨハヨハヨハヨ　テ　ユータ、ハハハハ（狩立、女性、七十五歳）

（狩立に近い集落の大久保の話し方について筆者が尋ねた時）大久保に行って聞いたら、おばさんが言ったように　ハヨハヨって（早口で）言う）

（イ）イマダニ　クヤシカッタイ、ソー　ワガジブンノ　オモッ　ゴテ　ソー　ツレンケン、ツイキラン　ケン

（堀河、男性、七十七歳）

（若い時はいつも大漁だったが、年老いてから、あまり獲れなくなったことに対して）未だに悔しいのだ、自分の思うように釣れないから、釣ることができないから）

（ア）では「おばさんが言った」内容の通り、大久保では「言う」のであり、ゴテの上接する節が、その例示となっている。ま

た、下接する「言う」よりも、上接する「おばさんが言った」に主張がある。（イ）においても、話者が「悔しい」のは「釣れない」ことではなく、例示して挙げる上接の節「自分の思うように」ならないことに対してであり、やはり主張は上接の節にあるといえる。

ゴトとゴテの使い分けは、同一人物の同じ上接語、下接語においてもみられる。以下の二例は堀河の男性（七十七歳）の発話である。

（ウ）モー　イマワナー、チョット　モ、ツカワン　ゴト　ナッタ　モンネ、ジダイオクレ　ジャモン　ゴチャーモン、イマ　ソゲナ　コトバヲ　イヨレバ

（（宇久方言を話す若年層がいないことに対して）もう今は、ちょっと使わないようになったもんね、時代遅れなもののようだもの、今そんな言葉を使っていたら）

（エ）マー　イマデワ　チョット　ソーユー　コトバ　ツカワン　ゴテ　ナッタ　バッテン、ムカシワ　ドコモ、コン　バカタレガマヨー、バーカヨ

（（昔の言葉遣いが乱暴だという話の時）今ではちょっとそういう言葉を使わないようになったけれど、昔はどこでもバカバカ（と言い合っていた））

二例とも「ツカワン　ゴト／ゴテ　ナッタ」である。しかし、（ウ）は、時代の流れによって方言を使わなく「なった」という変化の下接語に主張があり、（エ）は昔と現在の違う点の例示として「使わないように」なったという上接語に主張があることがわかる。

3．ゴッ（全十一例）

ゴッはナ行で始まる下接語に用いられることが多い（九例）。また、上接か下接の節に、否定表現が多く含まれる（十例）。

（ア）ヤッパー、モー、アンマ　ツカワン　ゴッ　ナッタラ　ワスルーモンネ（神浦、女性、八十七歳）

（（共通語で話す孫など若年層との会話で、宇久方言を最近話さなくなったことに対して）やはり、あまり使わないようになったら忘れるもんね）

（イ）タンボ　ガタ　イタッチャロ、シャベロ　ゴッ　ナカケン、ミメン　キコエニクカシ（太田江、女性、六十代か）

（（筆者が調査中に、奥にいた主人が出掛けて行ったことに対して）田の方に行ったのだろう、喋りたくないから、耳が聞こえにくいし）

（ア）は「ナッタラ」、（イ）では「ナカ」とナ行の下接語がつくのがわかる。また、両例とも否定表現を含んだ発話で、ゴッは用いられている。

4．ゴッテ（全三例）

ゴッテは、ゴッに接続助詞テがついた語形と考えられる。しか

し、ゴッと違う形態的特徴をもつと考えられる。

ゴミステバ　イク　ゴッテ　コー　ヒッコロンデ、ソーカンモー　オトロシクナッテ　イカンジョート（松原、女性、八十歳）

（（近所の某方があまり外出しなくなった理由）ゴミ捨てに行こうとして、転んでそれからもう、恐ろしくなって（どこにも）いかないでいるのだ）

ゴッでみられたようなナ行の下接語や否定表現を含んでいない。ゴッテで一単語としてとらえるべきかも合わせて、今後考察の必要があると考える。

5．その他（全三例）

「ミル　ゴン　ナカ」「オラン　ゴチョ　ハハハ」「ワタシノ　ゴトン」の三例は、一例ずつしか得られず、今後深い考察が必要である。

以上の分類から、ゴト系は語形によって用法を使い分けていることがわかる。

第二節　ゴチャー系

ゴチャーとは、ゴト系のゴテに動詞アルがつき、一語化した語形と考えられる。ゴトは下接の節にかかっていく語形であり、ゴテは上接の節を引用・例示で挙げる語形である。終止用法をもつゴチャー系は、上接に主張を表すゴテの用法が前提であると考えられる。ゴチャー系はゴチャーを基本形とし、ぞんざいな言い方のゴチャ、後続の音によるゴチャッ、ゴチャン、ゴチャイがみられ、博多方言の影響のゴタルやその他がある。意味の使い分けではなく、音による使い分けが考えられる。

1．ゴチャー（全七十八例）

以下に用例を挙げる。ゴチャーはゴト系とは違った用法で用いられている。

（ア）チングー　ッチ、モー　ムカシワ　ソゲンナ　ハナシモ　ヨー　シヨッタ　バッテ、イマワ　ダレモ　オラント　デスヨ、チング　ニナル　ゴチャー　オトコワ（狩立、男性、八十歳）

（（宇久方言で「親友」をチングということに対して）チングって、昔はそんな話もよくしていたけど、今は誰もいないんですよ、親友になるような男は）

（イ）メイジ　サンジュー　ナンネンカニ　デキタン　ゴチャー（十川、女性、七十六歳）

（（住む家が古くからあることに対して）明治三十何年かにできたものらしい）

（ア）は「男」にかかる連体修飾になっており、（イ）は言い切りになっている。

2．ゴチャ（全十一例）

ゴチャーと違い、短く発音されるものである。上接語や下接語はゴチャーと変わらない。（ア）の一例だけ、文末詞ナをもつ例がみられた。（イ）の、ゴチャーに文末詞ネがつく用例を挙げ、その違いを比較する。

（ア）ソンナ　ユワンケド、アソコワ　イナカ　バッカ　ユー　ゴチャナ（松原、女性、八十四歳）

（平郷の浜方地域に、東四町、西三町という俗称があるのに対して、筆者が北何町や南何町はないのか尋ねた時）それは言わないけど、あそこ（浜方）は田舎なだけに言うようだな）

（イ）チョーシノ　ワルカ　ゴチャーネー、ナンカ　ムカシン　ゲンキヤ　ナカ　ゴチャー（十川、女性、七十六歳）

（祖母の体調を心配している発話）調子の悪いようだね、なんか昔の元気はないようだ）

ゴチャーは（イ）のように文末詞ネがつくが、ナの用例はない。待遇価値による差であるとすれば、ゴチャーとゴチャで待遇差があると考えられる。ただ、用例が少ないため、今後の課題としたい。

次の3．の類の語形は、下接語の頭子音に影響を受け、「ッ」なら／t／、「ン」なら／n／、「イ」なら／j／の逆行同化であると考えられる。[4]

3．1　ゴチャッ（全十一例）

ゴチャッはタ行で始まる下接語がつくことが多い（十例）。特に過去の助動詞タが下接することが多い（七例）。

モー　シコーキナンカ　ノッタラ　バカン　ゴチャッ　タネー（松原、女性、八十四歳）

（宇久へは船しかないが、もしあるなら飛行機が速くて便利だという筆者の発話に対して）もう飛行機なんか乗ったら（速くて）馬鹿みたいだったね）

3．2　ゴチャン（全十例）

ゴチャンはネやナといったナ行の文末詞が、下接することが多い（九例）。

ソイトハ　ヤッパ　オンナノ　ゴチャンネー（平、女性、八十歳）

（「家族ぐるみ」を方言でユージューという話者自身の回答に補足して）そういうのは、やはり女（言葉）のようだね）

3．3　ゴチャイ（全六例）

ゴチャイは文末詞を伴い（五例）、特にヨが多い（三例）といえる。

フネノ　ナッタヨー、キタ　ゴチャイヨー　ッテ、ユートデス（十川、女性、八十一歳）

（「船が来たらしい」を宇久方言訳した回答）船（の汽笛）

が鳴ったよ、来たらしいよって言うのです）

4．ゴタル（全三例）

宇久方言ではゴチャーが広く使われている。ゴタルは用例も少なく、博多方言から伝播した比較的新しい語形ではないかと考えられる。

マタ　オークボニ　イッタラ、マタモ　オークボニ　キガネ、コトバガ　モー　ワカラン　ゴタール（飯良、女性、七十代か）

（周辺の集落との方言差について）また大久保に行ったら、また大久保に聞かないと、言葉がもうわからないようだ）

5．その他（全七例）

「ゴッタ」、「ゴタン」、「（キコー）チャー」、「ゴチャル」、「ゴタ」、「ゴチャエ」、これらの語形は一例（ゴタは二例）しかみられず、考察に加えない。[5]

第四章　ゴト系とゴチャー系の用法差

第一節　上接語

今回の調査で聞き取ることができたゴト表現の上接語を、ゴト系（表1）とゴチャー系（表2）それ

表1　ゴト系の上接語

	計	用言 動詞 連体形・未然形	用言 形容詞 ナイ・その他	格助詞 ノ・ン	助動詞 ン否定・タ過去・その他	助動詞 テイウ	計
ゴト	24	22	2	13	20	1	58
ゴテ	14	14					3
ゴッ	1	1	1		5		3
ゴッテ	1			2			11
その他	1	1		1	1		16
計	24	18	1	4	15	1	25
		4		9	3		
			1		2		
	22	22	2	13	20	1	58
		18	1	4	15	1	3
		4		9	3		3
			1		2		11
			1		1		16
							25

表2　ゴチャー系の上接語

	計	用言 動詞 連体形・未然形・アスペクト	用言 形容詞 ナイ・その他	格助詞 ノ・ン・ガ	助動詞 ン否定・タ過去・その他	体言 名詞	体言 動詞	計
ゴチャー	63	50	13	19	32	4	1	7
ゴチャ	17	12	4	5	12	4	1	7
ゴチャッ	8	8	9	13	18	2		126
ゴチャン	6			1	2			7
ゴチャイ	4	2	1		1			3
ゴタル	2	1		1	1			6
その他	1			1	1			10
計	4	3	1	3	4		1	11
					1			11
	17	4	2	1	8	2	1	78
	8	1	1	9	10			計
	6		8	1	1			
		1		3	4			
			1		1			
				1				
					1			
					1			

表3　ゴト系の下接語

	用言 動詞	用言 形容詞	用言 形容詞 ナイ・その他	体言 名詞	副詞	接続詞	終止 文末 チ・省略	引用	計
ゴト	20		2	2			1	1	25
ゴテ	9			1	3	1	1		16
ゴッ	6	4	1						11
ゴッテ		1			1			1	3
その他		1			1				3
計	35	9	8	2	5	1	4	2	58

表4　ゴチャー系の下接語

	用言 動詞 連体形	用言 形容詞 ナイ・その他	用言 形容 動詞	助動詞 タ過去・その他	体言 名詞	接続詞	終止 文末 ト	ネ	ナ	ヨ	その他	省略	句点	引用	計
ゴチャー	1				15	7	6	6		6	11	2	9	8	78
ゴチャ	2	2		1	3				1		2				11
ゴチャッ				7	1		2			1					11
ゴチャン								7	2	1					10
ゴチャイ						1		1	1	3					6
ゴタル													3		3
その他	3	1		7			1			1			1		7
計	6	3	1	14	19	8	9	14	4	12	13	2	13	8	126

ぞれの表で比較する。

ゴト系は動詞や助動詞、格助詞に、下接するときに多くみられる。語形毎にみても、その傾向にあると考えられる。一方、ゴチャー系は名詞や、副詞といったゴト系になかった品詞がみられるも、動詞や助動詞、格助詞に多くみられる。各語形でも、同様だといえる。

両系で比較しても上接語の特徴は同傾向がみられ、第二章で示した古典語の三構文を引き継いでいるとわかる。

第二節　下接語

ゴト系（表3）とゴチャー系（表4）の下接語を比較する。

ゴト系は動詞や形容詞といった、用言が主に下接する、連用修飾的用法がみられる。語形毎にみても、同様である。

一方、ゴチャー系では終止で多く用いられ、また、名詞、助動詞も多く下接している。終止用法や連体修飾的用法、助動詞として用いられている。語形毎にみると、ゴチャー、ゴチャは広く様々な品詞に下接しているが、ゴチャッなど下接語の影響がある語形は、やはりその音の語が多い。

両系の比較から、その用法において、ゴ

ト系とゴチャー系では使い分けされていることがわかる。

第五章　まとめ

宇久方言でのゴト表現の用法をみた。宇久方言では、ゴトとゴテをその主張によって使い分けていることがわかった。動詞アルとの複合語ゴチャーは上接節に主張のあるゴテについたものであると考えられる。

また、ゴト系とゴチャー系にも用法によって使い分けがあり、ゴト系は主として連用修飾的用法、ゴチャー系は終止用法や連体修飾的用法、助動詞としての用法と広く用いられていることがわかった。

今後の課題

今回深く考察を行わなかった、形態的特徴の分析を行う必要がある。また、調査方法も例文訳による方法を行い、よりゴト表現の文法体系を明らかにしたい。

注

(1) 二藩（福江藩、富江藩）によって土地を二分していた時期があったことや、五島列島の方言差の要因とされる隠れキリシタンがいなかったことが挙げられる。

(2) 宇久の郷には、さらに小さな集落があり、平郷（平、十川、松原、堀河）、小浜郷（蒲浦）、神浦郷、飯良郷、本飯良郷（宮ノ首、狩立）、大久保郷、太田江郷、野方郷、木場郷、寺島郷がある。今回は上記以外の集落を録音するに至らなかったが、郷内にはほかの集落がまだある。

(3) 共通語訳は筆者によるもの。筆者は、福岡県大野城市出身である。祖父母が宇久島在住で、幼い頃から宇久島に毎年訪れている。

(4) ゴチャッ、ゴチャン、ゴチャイそれぞれに音声的特徴がみられたが、基本形であるゴチャーには、過去の助動詞タや文末詞ナ、ネ、ヨがつく用例もみられ、安易に決定できないことがいえる。

(5) これらの語形はさらに、ゴチャー系とゴタル系のものに分けて考察できそうである。今後インタビュー等により、用例を集めて考察したい。

参考文献

宇久町郷土誌編纂委員会（一九六七）『宇久町郷土誌』
宇久町郷土誌編纂委員会（二〇〇三）『宇久町郷土誌』
住田幾子（一九八三）「「ゴト・ゴタル」に見る九州方言の基質」『国文学攷』98
月川雄次郎（一九九七）『宇久方言で「魏志倭人伝」を読む』

原田章之進（一九八三）「宇久・小値賀両島方言の所属」『活水日文』九巻
松村明編（一九六九）『古典語現代語助詞助動詞詳説』（学燈社）

（本稿は平成二十年度提出の卒業論文を、一部改訂したものである。）

（かどや・たかてる　二〇〇八年度本学卒業生）